— 観 察 記 録 —

鳥取県米子市におけるゴビズキンカモメ *Larus relictus* の観察記録

桐原佳介 *

〒 683-0341 鳥取県西伯郡南部町鴨部 721-1

(2016 年 8 月 9 日受付；2016 年 12 月 2 日受理)

キーワード：ゴビズキンカモメ, *Larus relictus*, 米子市, 鳥取県.

日本鳥学会誌

Japanese Journal of
Ornithology

© The Ornithological Society
of Japan 2017

Keisuke KIRIHARA*. A record of Relict Gull *Larus relictus* from Yonago City, Tottori Prefecture. Jpn J Ornithol 66: 57–61. (2017)

Key words: Relict Gull, *Larus relictus*, Yonago City, Tottori Prefecture.

721-1 Kamobe, Nanbu-cho, Saihaku-gun, Tottori 683-0341, Japan.

1. 種名・観察個体数：ゴビズキンカモメ *Larus relictus* 1 羽.

2. 観察者名：桐原佳介

3. 観察日時・場所：2016 年 2 月 12 日 15:02・鳥取県米子市淀江町佐陀の佐陀川河口右岸側の砂浜（35°27'9"N, 133°24'5"E 付近）で発見後，同年 2 月 17 日 10:54 から 12:57 まで佐陀川河口からおよそ 600 m 西の砂浜と佐陀川河口で，同年 2 月 23 日 11:16 から 13:08 まで佐陀川河口右岸側の海面と佐陀川河口内の砂浜で，同年 2 月 24 日 12:46 から 13:15 までと 3 月 2 日 17:14 から 17:30 までに佐陀川河口からおよそ 600 m 西の海岸で，同年 3 月 5 日 10:28 から 15:42 まで佐陀川河口から西におよそ 2.4 km 離れた日野川河口内の右岸の砂浜および日野川河口からおよそ 300 m 上流方向の中州，日野川河口右岸側 20 m の砂浜で，同年 3 月 8 日 8:28 から 12:35 まで日野川河口からおよそ 300 m 上流の中州と日野川河口及び河口右岸から東へ 100 m 以内の海岸で観察した（図 1）。また，同年 2 月 21 日，2 月 27 日，3 月 6 日にも，他の観察者によって同一地域内で観察されている（土居克夫，楠まどか，吉田 亮 私信）。

4. 観察距離：約 30 m の距離から 10 倍の双眼

鏡で発見した後，最短で約 6 m の距離まで接近して撮影した。撮影には 500 mm（35 mm 換算で 1,000 mm）の望遠レンズを装着した一眼デジタルカメラを用いた。また，観察には 10 倍の双眼鏡のほか，20 倍から 60 倍のズームアイピースを備えた望遠鏡を用いた。

5. 観察した環境：美保湾に注ぐ米子市淀江町の佐陀川の河口で，行政区分では川を挟んで同町佐陀と同町中間となっている。その後，同町佐陀の佐陀川河口と日野川河口の間の美保湾に面した砂浜，西伯郡日吉津村富吉の日野川河口の左岸側から右岸際まで張り出した砂州の先端部と日野川河口からおよそ 300 m 上流に砂が堆積した中州でも観察した。

6. 形態に関する記述：外見上の全長はウミネコ *L. crassirostris* と同じくらいだった（図 2）。頭部から胸，腹にかけて白く，背および肩羽はカモメ *L. canus* よりも淡い灰色だった。頭頂から後頸，胸にかけて黒灰色斑があり，特に後頸の斑は頭頂の斑よりも大きく色も濃かった。眼は黒かった。嘴は根元が緑灰色で先端寄りが黒く，上嘴の中央部は色が淡く若干赤味を帯びていた。脚は淡く赤味を帯びた黒褐色だった。上下の脛に縁どりがあった（図 2）。飛翔時，初列風切の外側 5 枚は黒くて最外初列風切先端の黒色部内弁に白斑があり，内側 5 枚はカモメよりも淡い灰白色で先端付近に

* E-mail: kirihara_k_m@sea.chukai.ne.jp

doi:10.3838/jjo.66.57

JOI:JST.JSTAGE/jjo/66.57

図1. ゴビズキンカモメの観察地点

Fig. 1. Locations where the Relict Gull was sighted.

図2. ウミネコと一緒に歩くゴビズキンカモメ (2016年2月23日)

Fig. 2. Relict Gull next to Black-tailed Gull, 23 February 2016.

黒斑があった。初列風切先端は、常に露出している部分だけ色が褪せて見えた。小雨覆から中雨覆にかけて褐色斑が散らばっていた。初列雨覆は外側5枚の外弁が黒く、それ以外はカモメよりも淡い灰白色だった。大雨覆は灰白色で無斑だった。内側初列風切及び外側次列風切の先端付近に黒斑があり、翼の後縁に黒斑が並んで見えた。尾羽は白くて各羽の先端に黒斑があったが、中央尾羽は

著しく摩耗しており、黒斑が不明瞭だった(図3)。

7. 計測値：—

8. 種を同定した規準：本個体は、嘴の形状と体型、羽色から、カモメ科 Laridae の一種と考えられた。黒っぽい嘴、縁取りがある上下の喙、後頭から後頸にかけて黒灰色斑があること、雨覆と三列風切に黒褐色斑があること、翼の後縁に黒斑が並

図 3. 砂浜に舞い降りるゴビズキンカモメ (2015 年 3 月 5 日)

Fig. 3. Relict Gull alighting on the beach, 5 March 2016.

んでいること、黒い初列風切、黒っぽい脚、尾羽先端に黒斑があることは、ゴビズキンカモメの第1回冬羽の特徴と合致する (Olsen & Larsson 2004; 氏原・氏原 2010)。そして、他に類似する種としてミツユビカモメ *Rissa tridactyla*、チャガシラカモメ *L. brunnicephalus*、ユリカモメ *L. ridibundus*、アメリカズグロカモメ *L. pipixcan*、クロワカモメ *L. delawarensis* の第1回冬羽、およびカモメの第2回冬羽が考えられた。ミツユビカモメは、脚が短いこと、眼の後ろに黒斑があること、尾羽が浅い凹形である点が観察された個体と異なっていたことから除外された (桐原ら 2009; 氏原・氏原 2010)。チャガシラカモメとユリカモメは、嘴がオレンジ色っぽいこと、眼の後ろに黒斑があること、脚がオレンジ色でより短いことから除外された (氏原・氏原 2010; Birdlife International 2012)。アメリカズグロカモメは、体がずっと小さく、頭が黒っぽいこと、背が濃い灰色であることから除外された (桐原ら 2009; 氏原・氏原 2010)。クロワカモメは、嘴基部と脚がピンク色であること、喉に縁取りがないことから除外された (Brazil 2009; 氏原・氏原 2010)。カモメは、顔の褐色斑がより濃いこと、背の灰色がより濃いこと、脚が黒っぽくないこと、喉に縁取りがないことから除外された (氏原・氏原 2010)。以上の点から、本個体はゴビ

ズキンカモメの第1回冬羽であると判断した。

9. 観察した行動：第1発見である2016年2月12日は、15:02に佐陀川河口内右岸側の砂浜で、ヒドリガモ *Anas penelope*、オナガガモ *A. acuta*、マガモ *A. platyrhynchos*、カルガモ *A. poecilorhyncha*、オカヨシガモ *A. strepera*、ホシハジロ *Aythya ferina*、アオサギ *Ardea cinerea* のおよそ50羽の混群のそばで留まっているところを発見した。その後、5分ほど目を離している間に見失い、周辺を探したところ、佐陀川河口左岸のコンクリート堤防上に移動して座っているのを再確認した (15:02~15:07)。同年2月17日に、佐陀川河口左岸側の海岸を歩き回って砂浜に落ちているものを採食しているところを発見し、後に佐陀川河口へ移動して留まった後、同地で採食するのを観察した (10:54~12:57)。同年2月23日に、佐陀川河口右岸側の海面を泳いで水面にあるものを盛んに拾って食べているのを発見し、後に佐陀川河口内の砂浜に移動して採食するのを観察した (11:16~13:08)。同年2月24日に佐陀川河口で確認できなかったため、周囲を探索したところ、日野川河口と佐陀川河口の間 (佐陀川河口からおよそ600 m 西) の砂浜を歩き回って採食しているのを発見、観察した (12:46~13:15)。その後、同年3月2日に、佐陀川河口からおよそ600 m 西の砂浜を歩き

回って採食しているのを発見して観察し、17:30に西に飛び去って見失った(17:14~17:30)。同年3月5日に、日野川河口内右岸の砂浜を歩き回って採食しているのを発見した。その後、日野川河口からおよそ300 m上流方向の中州に移動してしばらく留まってから、日野川河口内および河口右岸側の砂浜に移動して採食するのを追跡観察した(10:28~15:42)。同年3月8日に、日野川河口からおよそ300 m上流の中州に留まっているのを発見した後、日野川河口内及び河口右岸から東へ100 m以内の海岸に移動して採食するのを追跡観察し、これが終認となった(8:28~12:35)。この時に、海岸に漂着していたカニ類の脚を拾って丸呑みにしたのを観察した(図4)。このように、本個体は2016年2月12日から同年2月23日まで佐陀川河口で観察され、同年2月24日から同年3月2日まではより西の美保湾の海岸で、同年3月5日から同年3月8日の終認まではさらに西の日野川河口で観察された(図1)。本個体は、水辺で留まっているカモ類(ヨシガモ *Anas falcata*, ヒドリガモ)やカモメ類(カモメ, セグロカモメ *L. argentatus*, オオセグロカモメ *L. schistisagus*, ウミネコ), カワウ *Phalacrocorax carbo* と一緒にいることが多かったが、群れの中に混じるのではなく、群れから少し離れて単独でいることが多かった。採食時は、カモメ, ウミネコ, ハシボソガラス *Corvus corone*, ハクセキレイ *Motacilla alba*, ツグミ *Turdus naumanni*, シロチドリ *Charadrius alexandrinus*, イソシギ *Actitis hypoleucos*, イソヒヨドリ *Monticola solitarius* が一緒にいることがあり、他のカモメ類から威嚇されることが多かった。また、地上で採食する時に、同時に観察できていた他のカモメ類よりも長距離を歩き回っていた。そして、飛行しながら獲物に急降下することはほとんどなく、地上に降りてから歩き回って、あるいは水面に降りてから泳ぎ回って食物を探す傾向が強かった。本個体は佐陀川河口の砂浜や日野川河口の中州を休息地として利用し、休息地周辺の海岸を採食地として利用していたが、ねぐらについては特定できなかった。

10. 写真の有無：あり(図2-3, 電子付録1-2)

11. 死体・標本保管場所：—

12. 過去の記録とその文献：本種は、IUCNのレッドリスト及びBirdlife InternationalのレッドデータブックでVulnerableと評価されており(Birdlife International 2001, 2012)、世界の推定個体数は15,000~30,000羽と推定されている(Birdlife

International 2012)。世界的に希少種であり、未だ謎が多いカモメとして知られている(Birdlife International 2001)。モンゴル高原周辺で繁殖し、現在は4つの孤立した繁殖集団(中央アジアのカザフスタンのアラカル湖とバルハシ湖, ゴビ砂漠, ロシア東部のチタ州と中国北東部とモンゴル北西部, オルドス高原)があり、繁殖個体数が最も多いのは中国である(Ma et al. 2010)。そして、渡りの時期や非繁殖期は渤海で多く見られ、偶発的に日本, 韓国, ベトナム, 中国東部, 香港でも記録されている(Duff et al. 1991; Liu et al. 2006)。我が国では、きわめてまれな迷鳥として、1984年9月から10月に大阪府久米田池(日本野鳥の会大阪支部1987), 1985年1月に神奈川県相模川河口(石江ら1986; 中村1989; バーダー編集部1992), 福岡県(森本ら2007)の3例が報告されている(日本鳥学会2012)が、福岡県の記録については根拠となる写真や解説がない。

13. その他：—

14. 考察：

本観察は、国内で4例目、中国四国地方初記録の報告と思われる。本種は、初認日から終認日にかけて、発見場所が徐々に西へ移動している(図1)が、移動距離がおよそ2.5 kmと短いことや、常に1羽だけ確認されていること、異なる場所で同時に確認されていないこと、佐陀川河口から西の砂浜に移動して採食していたこと、3月2日の観察で西に飛び去っていたことから、これらは同一個体である可能性が高い。また、本個体は一緒にいた他のカモメ類と比べて地上を歩き回って採食する傾向が強かったが、Brazil (2009) や Olsen & Larsson (2004) にも「チドリのような歩き方をする」という記述があり、この性質を裏付けている。

本稿をまとめるにあたり、観察記録を提供頂いた土居克夫氏、楠まどか氏、吉田 亮氏、標識調査に関する情報を提供頂いた山階鳥類研究所、福岡県の記録についての情報を提供頂いた岡部海都氏、日本野鳥の会北九州代表の森本嘉人氏、北九州市立自然史・歴史博物館の武石全慈氏、有益な助言を頂いた匿名の査読者に心から御礼申し上げる。

引用文献

- バーダー編集部(1992) 冬の水辺でカモメに会う。Birder 6 (11): 4-25.
BirdLife International (2001) *Threatened birds of Asia: the BirdLife International Red Data Book*. BirdLife International, Cambridge.

- BirdLife International (2012) *Larus relictus*. The IUCN Red List of Threatened Species 2012: e.T22694447A38044464. (online) <http://dx.doi.org/10.2305/IUCN.UK.2012-1.RLTS.T22694447A38044464.en>, accessed 2016-9-21.
- Brazil M (2009) *Birds of East Asia*. Princeton University Press, Princeton.
- Duff DG, Bakewell DN & Williams MD (1991) The Relict Gull *Larus relictus* in China and elsewhere. *Forktail* 6: 43-65.
- 石江 馨・石江 進・中村一恵 (1986) 日本におけるクロワカモメ *Larus delawarensis* の観察記録. *Strix* 5: 62-64.
- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸 (2009) 日本の鳥 550 水辺の鳥増補改訂版. 文一総合出版, 東京.
- Liu Y, Holt PI, Lei J-Y, Zhang Y & Zhang Z-W (2006) Distribution, numbers and age structure of Relict Gull *Larus relictus* in Bohai Bay, China. *Waterbirds* 29 (3): 375-380.
- Ma M, Chen Y, Bayahen K, Hu B-W, Li F, Wu J-Q, Gao X & Mei Y (2010) Seasonal changes in the number of Relict Gull (*Larus relictus*) at Ebinur Lake, Western China. *Journal of Arid Land* 2: 151-155.
- 森本嘉人・武下雅文・川崎 実 (2007) 北九州市の野鳥一覧の改訂について. わたしたちの自然史 (100): 147-163.
- 中村一恵 (1989) ゴビズキンカモメについて. *野鳥* (514): 40.
- 日本鳥学会 (2012) 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.
- 日本野鳥の会大阪支部 (1987) 大阪府鳥類目録. 日本野鳥の会大阪支部, 大阪.
- Olsen KM & Larsson H (2004) *Gulls of Europe, Asia and North America*. Princeton University Press, Princeton.
- 氏原巨雄・氏原道昭 (2010) カモメ識別ハンドブック改訂版. 文一総合出版, 東京.

電子付録 1. 浜辺に落ちていたカニ類の足を食べるゴビズキンカモメ (2016 年 3 月 5 日)
Supplement 1. Relict Gull eating crabs legs that had fallen on the beach, 5 March 2016.

電子付録 2. 座って休憩しているゴビズキンカモメ (2016 年 2 月 12 日)
Supplement 2. Sitting Relict Gull, 12 February 2016.
<http://doi.org/10.3838/jjo.66.57>